

仏画に込めた 安寧の祈り

子どもの頃に見た仏画に感動し、
40歳でライフワークに。

以来、25年間描き続けてきた腰塚勝也住職に、
描く面白さや絵に向かう気持ちなどを聞いた。

かつて心震えた思いから 生涯の趣味に選んだ仏画

仏教絵画とも呼ばれ、仏や菩薩、仏教説話画など仏教を題材とし、礼拝や儀式に使用されてきた仏画。その起源は、日本に仏教が伝わった飛鳥時代にまでさかのぼるといわれている。

現代の仏画の多くは専門の絵師によるもので、住職自ら筆を執る人はそう多くない。開光山遍照院の腰塚勝也住職は、そうした数

少ないうちの一人だ。

仏画を描こうと思いついたのは、40歳になった頃。当時は、神奈川県にある川崎大師に勤務していた。「区切りの良い年齢を機に、ライフワークになるものを始めたいと思ったのです」と腰塚住職は話す。

もともと絵は見るのも描くのも好きで、学生時代には油絵の経験もあった。実家の寺で子どもの時に仏画を見て感動したのを思い出し、東京で開かれていた有名

な仏画の先生に師事、画材のイロハから学んだ。絵と向き合うのは性に合っていたのだろう。多忙な中、時には休暇を取って一日中、習う日々を過ごした。

筆を執ってから4年、ついに最初の作品が完成した。手本に選んだのは、国宝の絹本着色普賢菩薩像（東京国立博物館蔵）。数多い普賢菩薩像の中でも屈指の名品とされ、平安時代後期の仏画を代表する作品だ。

原本では白い象の足の部分が

失われている。腰塚住職は、昔の人は象を見たことはなかったろうと想像、他の古い仏画の象の足が犬を真似ていたの、この仏画もそれに倣って仕上げた。「絵は、自分なりの解釈を加えられます」と、にっこり笑う。

完成までは苦難の道をたどった。油絵とは画材がまったく違う。仏画は木枠に絹の布を貼り、墨で下絵を描き、色を付けていく。絵の具は膠で溶いた、日本画のものを使う。大きさも畳一畳ほ

どあった。

膠は温めると溶ける性質がある。「何カ月もかけて描いた絵に満足いかず、泣く思いで風呂場で熱いシャワーにさらし、絵の具を落とすことが何度もありました」と、振り返る。描けば描くほど、昔の人の技術の差に打ちのめされたそう。そうして出来上がった絹本着色普賢菩薩像は、特別な作品になった。

日本の国宝の多くは仏教芸術であり、自身が感動した良さを伝えたいと、以降、心惹かれる作品を題材に次々と仏画を手掛けていく。時には絵の具の乾くのを待つ間に、別の絵に取り掛かることもあるそうだ。

人の心を動かしたり 繋げる仏の縁

腰塚住職の仏画は、自身の時間を充実させただけでなく、見た人にも影響を与えた。今でも続けている活動の一つに、川越少年刑務所の教誨師がある。所へ定期的に赴き、受刑者に向けた説法を行い、経を読む。ある日の教誨で絵を見せながら「この制作に4年をかけた」と話したところ、受刑者の一人が腕組みをしてしばらく無言で見入っていた。声をかけると、刑務所に入って4年だ、その青年は「俺の4年間は何だったのだろう」と、ぼつりとつぶ

やいた。その後、教誨に何度も顔を出すようになり、出所後は腰塚住職のもとへ挨拶にも来てくれた。自分の作品が受刑者の心に何かを生みきっかけになったのではと、深く心に残ったそう。

不思議な出来事もあったと腰塚住職は続ける。

大学の友人が住職を務める高知県足摺岬・金剛福寺に、秘仏の三面千手観音菩薩像が安置されている。その神々しい姿を忘れられず、絵に起こした。裏から金箔を貼る技法などを駆使し、制作には6年を費やす大作となった。

描いているうちに亀に乗って現れるアイデアを思いつき、像にはない亀を描き加えた。出来上がった絵はカレンダーにして、友人のもとへも送った。

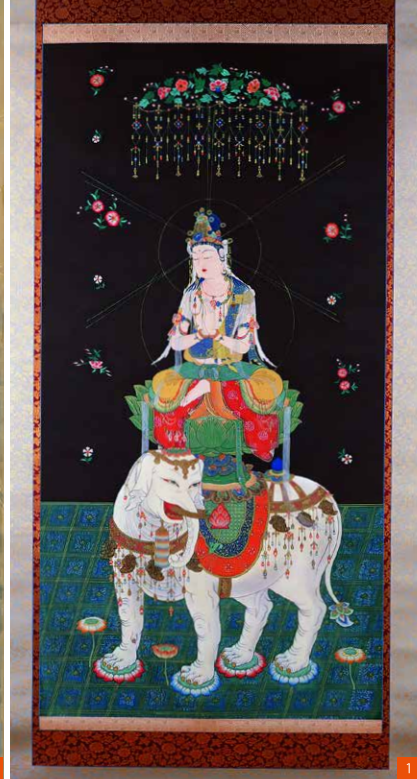
その後、友人から電話があった。四国を巡る遍路を案内する、広島のある有名な先達がある時から「うちに観音様が来るよ。亀に乗って」と言い出した。皆が不思議に思っていたところ、ほどなくして同寺から彼女の元に、まさにその図柄の仏画カレンダーが届き、周りの人々を大いに驚かせたという。「仏への思いや祈りは、不思議につながっていくことを実感しました」。

仏画の良さを広め、描く楽しさを知ってもらおうと月に1度、仏画教室を開催。見本を透かして描

く写仏や絵の具の扱い、色付けなどを指導している。昔からある、金箔を細く切ってきらびやかな文様を描く鍍金の技法を、専門家を呼んで教えてもらう教室も開催しており、仏画教室の中でも珍しいと評判だ。

今年3月、同院に建立された会館2階にギャラリーを新設。腰塚住職の作品を常設するだけでなく、フロアでヨガ教室や落語会を開くなど、アイデアに富んだ活用を行う。今後は、仏画教室の生徒の作品展も開催を計画している。

仏教が日本に伝わった時、持ち込まれた仏教美術の力や神々しさが、教えを世に広める後押しになったのではと腰塚住職は語る。「その末端にいた意識を持ち、制作や教室の指導にあたっていきます」と続けた。今はコロナ禍にあたり、世情も落ち着かない。絵を通して、穏やかな気持ちや祈りが伝わるよう、今日も腰塚住職は経を読み、筆を執る。



腰塚住職が初めて描いた仏画の絹本着色普賢菩薩像。原本では欠けている象の足を創作で補っている。友人の寺にある三面千手観音菩薩像を描き起こし、亀に乗せるという工夫を加えた。裏から金箔を貼り、表から透けるようにして神々しさを出している。遍照院会館の2階のギャラリーでは、腰塚住職の描いた仏画を鑑賞できる。フロアではヨガ教室なども開催されている。仏画教室で指導を受ける生徒の皆さん。見本を透かして鉛筆で下絵を描き起こし（写真1）、墨で仕上げた後、日本画と同じ画材で彩色していく（写真2）。

Information

開光山 遍照院 かいこうざん べんしょういん
久喜市久喜北1-8-53 TEL. 0480-22-6303
http://henjounin.sakura.ne.jp/index.html
※2階ギャラリーの入館は無料。
住職が不在の場合もあるため、事前に問い合わせを



4枚合わせの金箔（鍍金）を、筆を使って画面に貼る作業

開光山 遍照院 住職 腰塚勝也さん
1993年から筆を執り、仏画を描き始めた。2010年から国内各地で仏画展を開催。左右対称に描くのが仏画といい、それがかざるとう人間臭さが出るという。そのため顔を描くときが一番緊張し、集中する